二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 江崎トオル
挿絵 さあぺんと

プロローグ 014
第一章 玲奈一 020
第二章 由香里一 074
第三章 玲奈二 107
第四章 由香里二 127
第五章 壊変の兆し 153
第六章 姉妹の選択 191

登場人物紹介

Characters

霧島 玲奈（きりしま れいな）

霧島家の次女。鳳翔学園高等部の三年生で、生徒会長を務める。シスターセリティアに変身。

霧島 由香里（きりしま ゆかり）

霧島家の長女で鳳翔学園高等部の数学教師。シスターガーディアンの長姉、シスタークレアに変身する。

霧島（きりしま） つぐみ

霧島家の末妹。鳳翔学園初等部に通う少女。シスターベイルに変身する。悪の思念に精神を蝕まれ、姉たちを憎むようになる。

『第六章　姉妹の選択』より

「調子が戻ってきたようですな、霧島先生」
心臓が高鳴っている……校長の声は聞こえない。口の中にある男性器だけがすべてだった。舌を絡ませ、滲み出る先走りをずるずると吸い取る。
まるで風邪でもひいたように身体が熱く、頭もぼうっとしていたが不快ではない。心地よい熱に敏感になった乳房を、生徒の顔に擦りつけた。ずっと母乳を漏らし続ける乳首が顔面に摩擦されてぴりぴりと痺れている。
「はむ……。ん……はぁう……」
フェラチオに忙しい唇から漏れた吐息は甘く蕩けていた。うっとりした目から流れる涙が歓喜のそれであることを表すように目元は緩み、頬はほんのりと上気している。口元をベトベトにして夢中になって吸いついている様は艶めかしいのに、同時に清廉なまでの清らかを感じさせてくるのだ。男の反応を確かめるように時折上目遣いに見上げられるだけで、生徒はたまらなく嗜虐心をそそられてしまう。
くちゅくちゅとはしたない音を立てていた秘壺から舌が抜かれ、性器全体をべろりと舐め上げる。クリトリスを舌先に弾かれ、細い背中がぴくんと揺れた。四肢の力が抜け、片肘をついて上半身を支えていたクレアが倒れそうになる。
「んはぁぁ！　っぷ……！」
教師の弱い箇所を見つけた生徒が、嬉々として陰核の蕾に舌を合わせる。ざらりとした

味蕾で繊細な神経の基点を擦られ、クレアは今度は大きく叫び、背を跳ねさせた。
顔面を蹂躙していた乳房が浮き上がり、乳肉の重さにされるがままだった生徒も自由を取り返す。目の前にぶら下がった大きな肉の塊を両手で捕らえ、にゅっと鷲掴みにしていた。つんと勃った乳首から母乳が溢れ出し、広がっていた聖衣の亀裂が広がっていく。
「ひゃあああっ！　む、胸が弾けちゃううっ!!」
聖なる力の鈍った衣が、絞られた乳肉の圧迫であっけなく破れつつあった。片側の乳房は切れ目を大きくしただけだったが、穴の大きかったもう片方の乳房は限界だ。
亀裂から覗く肌が餅のように膨れて布を押し退け、やがて一気に聖衣を決壊させる。絞られてもにゅっにゅっと顔を出すだけだった乳肉が、爆発したように穴を広げつつはみ出てきた。ぴりぴりと布を裂く音をさせながら、豊乳全体がまろび出てくる。
生徒はその質量と柔らかな肌に見入りながらも、すかさず唇を突き出して乳肉をついばみ、舌で乳首を搦め捕って母乳を吸い上げる。
「あああああ……！　ひゃふ、は、ひいいっ！」
尻を振り四肢の指を握りしめて、ただひたすらに悶えるクレア。
口から抜け出たペニスがちょうど射精して、彼女の顔を濡れ汚していく。むわっと立ち込めた匂いの元が顔面を流れ落ち、パクパクと開閉を続ける唇に糸を引かせていた。
一緒に揺れ動くヴァギナにしゃぶりついていた生徒が、動きを止めようと尻を掴んで顔

を密着させる。膣口にズッポリと入り込んだ舌が、うねうねと動いて中から溢れる液体を啜り上げた。ずるずると音を立てて思いきり吸われた秘壺に、強烈な疼きが発生する。
「んくっ！　は……ああ……も、っと……奥を……！」
舌にほじられる膣口のもっと奥深く。そこが男性器を欲していた。舌などではもう満足できない。身体をちろちろと炙る火を強め、もっと熱く焼き焦がしてほしい――。
「だめなのっ！　もっと……奥を……突いてぇ……っ！」
切なげに訴えるクレアに促され、生徒はいまにも暴発しそうなペニスを握った。先端を舌にほぐされた入り口に合わせ、そのまま腰を押し出していく。
ぷぷっ……と秘穴の広がっていく感覚を感じ、彼女の身体は歓喜に震えた。亀頭の先端が沈み、カリ首が膣口に引っかかる。そしてそのままひと息に――。
そこで邪魔が入った。校長だ。
「違うでしょう。あなたは教師である前に牝豚なんですよ……。つまりは我々人間に奉仕する立場の家畜です」
（ああ……生徒たちの前で……っ）
葛藤するほどの余裕はない。もう我慢の限界だ。
クレアは考えるより早く、こくこくと頷いていた。
「なら、もっとお願いの仕方があるはずです。ほら、教えたように……」

腰を突き入れようとしていた生徒を押し止め、校長が促す。

「どうか……私の……」

とつとつとした喋りに見えたが、表情は違う。涙を流す頬は羞恥で真っ赤に燃え、口元に浮かぶかすかな笑みの妖艶さを際立たせていた。

「汚れたオマ〇コであなたのペニスを慰めさせてください……！　あなたの精で私を清めてください……っ！」

この肉体で相手が悦べば悦ぶほど身体の芯が疼く。そして疼いた身体を慰めてくれるのもまた男。彼女は強要されながらも、それを悦んでいた。すべての重責から解放され、なにも悩むことなく男に従属し、身体と心を快楽に委ねてしまうことを。

教師として扱ってきた相手に淫らすぎることを懇願され、生徒は奮い立った。校長の許しを得るまでもなく腰を押し出していく。

ぷぷぷ、と愛液を滲ませて膣道が押し開かれる。膣内は悦びに震え、肉をうねらせて侵入者を迎えた。ぴたりと閉じていた膣内の壁はざらざらした凹凸を愛液に濡らし、亀頭を痛いほどに食い締めてくる。

「あはぁ……ペニスが入ってきていますう……っ！」

彼女の歓喜がそのまま膣の動きになって現れる。亀頭が埋まっただけで膣壁がざわざわと騒ぐように波打った。中へ中へと吸い込まれるような蠕動にカリ首が優しく擦られ、生

徒のペニスは亀頭を埋めたところですぐに爆発してしまう。熱い液体が勢いよく、膣口のすぐ裏に充満した。

「はあああっ……！　あつい……あつぅ……いいっ!!」

とろんとした瞳が歓喜に揺れる。射精したにもかかわらず萎えない勃起が、そのまま押し入ってきたからだ。身体の隅々にまで行き渡るぞくぞくした感覚が、全身に望んだものの到来を告げていた。

自らの白濁液が、挿入によって溢れ出している。ぎちぎちに締まった膣穴が許すかすかな隙間から、愛液と一緒になって泡立ち、押し出されている。太腿に流れ落ちる熱い液体の感触が心地よい。なにより、射精にも屈せず力強く股を割り裂くペニスの感触が。

「すご……ひはっ！　すごいいっ……！　硬くてぇぇっ！」

若さに任せて強烈なピストンを始めた生徒の動きが、彼女の身体を激しく突き上げた。天を衝くような角度にそそり立つペニスが無理やり膣内に埋め込まれる。背筋側の膣壁が強烈に押し上げられているようだった。ごりごりと擦られる膣内の肉があまりに強烈な刺激に悲鳴を上げている。

クレアの乱れ様を下から見ていた生徒も負けじと乳房を吸い始めた。下半身と上半身、双方の快感に身体が麻痺したように感じられて、彼女は反らせた背を引きつらせるようにして天を振り仰いだ。濃い紫の髪が舞い、窓から差し込む夕日に透けて輝く。

「はっ、はふうっ！　す、すご……ひ。おかひっ……くなるうう……っ」
ガクガクと首を揺らして甲高い声を上げる聖女。男に身体を好きなように嬲られてはいても、彼女からは清楚さと荒々しさが同時に感じられる。さらけ出した本能のままに振る舞う彼女は、女神のように美しく、獣のように荒々しかった。
乳首が吸われるたび、背を震わせて反応を返す膣口がきゅっと締まる。そして愛液の噴出と同期して乳首からは母乳が流れ出していた。
「む、胸……えっ！　吸ってください……もっと強く吸い出して……！」
それこそ牛のような体勢でぴゅるぴゅると垂れ流され続ける母乳は、性感に合わせて次第に濃くなってきているようだ。クレアの下に身体を横たえている生徒が、左右の乳房を交互に吸う。片手には余る柔肉の弾力を両手で絞られ、乳輪ごと勃起して乳液を滲み出させる乳首。ヴァギナと同等の性感帯になったそこが、口に摘まれ、ちゅうっと吸われた。
「はうううっ！　ひ、はひっ……くううっ!!」
乳首が甘噛みされ、引っぱられる。ぞくん！　と全身が痺れ、一瞬遅れて頭から爪先までが突っ張る。途端、射精のように大量の母乳が噴き出した。口に含まれていないほうの乳房からその勢いの強さが見て取れる。敷かれたマットにぶつかった母乳が、びちゃびちゃと跳ねて染みを作っていた。
「出て……るっ！　わたし……イッちゃ……イッちゃい……ましたぁ……っ」

教え子たちの前でこんな醜態を晒すことも、教え込まれたいやらしい敬語を使うのにも抵抗はなかった。軽い絶頂に身体を震わすクレアの瞳は、むしろ悦びに溢れている。

ただ、彼女の肉体はまだ最終的な悦びを求めてくねっていた。もっと強い絶頂、もっと心地よい頂点を貪欲に目指している。

ぴゅっ、ぴゅっと勢いよく流れ出る液体を飲み下しながら、生徒は乳腺を舌でちろちろとかきくすぐってくる。射精直後のペニスのように敏感な乳首の蕾が、あっという間にむくむくと痼り立っていた。まるで彼女の貪欲さを体現したように。

クレアは一度射精を受け止めて以来空いていた口を、なにかを求めるように開いた。犬のように突き出された舌が、唇を濡らすように這わされる。宙を見つめていた視線が揺らぎ、股間を屹立させたまま周囲を囲む生徒たちへと誘うように向けられていた。

（ああ……すごい匂い……。でも、とてもいい……におい……）

ふらりと近づいてきた生徒のペニスが眼前にある。強烈な匂いが鼻腔をくすぐり、彼女の中にさらなる興奮を湧き起こした。

まだ包皮が剥けきっていないペニスに、首を伸ばして必死にしゃぶりつく。柔らかな唇がペニスを固定し、つうっと伸びた舌先が包皮をめくる。そのまま恥垢をかき出すように、亀頭周辺がぐるりと一周、擦り上げられる。

ビクンと反り返ったペニスが口から跳ね出る。彼女は男の味を確かめるように喉を鳴ら

したあと、伸ばした舌を再び絡めた。自分の舌に奉仕されて悦ぶ肉棒が愛おしい。こうして悦びを引き出し、引き出される行為が愛おしい。

彼女は全身を汗まみれにしながら、それでも身体をしならせた。激しい動きに玉の汗が飛び散り、膣内が掻き回される。心音が限界まで高まって身体を疲労感が包んでいるが、それさえも心地よい疲れに感じられてしまう。

執拗な舌奉仕に、包皮がずりっと剥き上げられた。と同時に、迸る精液。

「はむ……ん！　ひふっ！　ん、んあ……！」

びくんびくんと跳ねる肉棒を舌がすかさず捕らえ、一滴も逃すまいと啜り上げる聖女の口腔。くわえられた生徒からしてみれば、精液を放出したのか吸い出されたのか分からなかった。吸引に腰が痺れガクガクと震えるほどの快楽を感じて、思わず床にへたり込む。

それでも無意識に追いすがったクレアの口からやっと男根が抜け、唇から白濁糸が引いていた。喉の奥に流し込んだ粘液が胸を下りていくのを感じながら、その充足感を噛み締める。彼らを助ける手助けができて、こんな気分にもなれて——最初からなにも問題はなかったのだ。苦痛に感じられていた行為が実は、こんなに充実したものだったのだから。

「んあ！　もっと……もっと気持ちよくなってください……私の身体で……ふぁ……んっ」

身悶えながら夢うつつの面もちで呟いた彼女は、目の前に突き出された新たなペニスを手の中に包み込んだ。口寂しさに喘ぐ口にも、別の肉棒で蓋をする。すべては彼女自身が

望んだことだった。
心が満たされると、あとは肉体だけだった。彼女が積極的に快楽を求める心に反応し、膣内がきゅうっと狭まる。内包したペニスを擦り、擦られたいという欲求通りに、肉がうねり愛液がトロトロと流れ出す。
背後から突き上げてくる生徒が身体の角度を変え、肉棒の根元までをヴァギナに埋め込んだ。ごつっ、と奥に当たる感触。子宮が押し上げられる衝撃が、下半身に鈍い悦楽の火花を飛ばしていた。執拗に揉みこねられる乳房が一段と張りを増し、断片的な放出を続けていた母乳噴火の間隔が短くなってきた。
「は……くぅん！　あひぃ……っ、ふ、うう……!!」
口と乳房、そして女性器の三点刺激にうっとりしていたクレアの目が、ゆっくりと開かれていく。潤む瞳が宙に見つめているのは、もうすぐ訪れようとしている絶頂への予感。
彼女の口からペニスがこぼれ落ちる。体重を支えていた腕が曲がり、身体の下にいる生徒に抱きついていた。年頃の生徒の胸板に張り詰めた乳房を押しつけ、潰し、身体ごと擦りつけるように悶えさせる。男の硬い胸板に押しつけられ陥没した乳首が、ぴくんぴくんと卑猥に動いていた。
「あはっ！　イク……！　イッちゃう……！　もお……すぐ……あふぅうう!!」
叫びとともに尻が突き上げられる。その動きに応えて突き込まれた男根に、ぴっちりと

密着した膣襞がぞわぞわと蠢いた。たまらず射精を開始し、白濁をぶちまけ、突き込みながらクレアの背中を抱き締める生徒。密着した身体がペニスを最奥に導く。

「ひいぃ！　ふぁあっ！　イク……イクううううっ!!」

身体全体が引きつる。ぐいと反らした背、大きく叫んでぷるぷる痙攣する唇、指先まで張り詰めた足。そして、溜まりに溜まった母乳を噴き出させる二つの乳首。

彼女は絶頂に放り上げられた。その開放感はいままで味わったことのないほどに充実している。自然と頬が緩み、精液や母乳の飛び散っていた顔には笑みが浮かんでいた。

凄絶なほどの美しさに彩られて、彼女の身体から力が抜けていく。

逆流する精液を泡立たせて、狭い膣口から肉棒が抜き出された。しかし、彼女の秘穴はぱくぱくと呼吸を繰り返しながら、さらなる剛直の侵入を待ち受けているように見える。

それは彼女の露出した欲望を忠実に体現していた。

※

玲奈が体育館に向かって走っている。姿はすでにシスターガーディアンのものだ。

少し前、初等部の校舎まで捜しても姉を見つけられなかった彼女はもう一度職員室へ出向いた。もしかするともう戻っているかも、と思ったからだ。そこで気づかされた。

職員室の中は閑散としていた。いつもなら授業を終えた教師たちでにぎわう時間帯だというのに。しかも、そこにいた数少ない教師たちは彼女の顔を見て気まずそうに顔を逸ら

した。なにかを知っている――そう直感した玲奈は近くにいた女教師を問い詰め、やっと理由を聞き出すことができた。由香里はここにいたのだ。教師たちに強要されて。

淫気に冒された教師たちを由香里は助けようとしたらしい。だが、その努力はほとんど報われなかった。いままであちこちを走り回っていた玲奈にはその理由が分かる。夕方になってオレンジ色になるはずの空は、彼女から見れば真っ黒だったからだ。淫気の包囲網は確実に範囲を狭めている。もしその中にいる人間の理性を飛ばすようなきっかけがあれば、簡単に狂ってしまうほどに。

職員室に残っていた教師は、一度は淫気の狂気に囚われながらも解放された数少ない人間だった。それが由香里による助けがあってなことは言うまでもない。その教師は解放された途端、自分のしたことに混乱し、他の教師に交ざることもできず、ここに残っていたのだという。だから、由香里の妹である玲奈に対して後ろめたかったのだ。

由香里は教師に連れられて体育館に向かった……そう聞いて彼女はすぐに走り出した。

（待ってて……私が助けてあげる……！）

そうしていま、玲奈は体育館に辿り着いた。緊張した面もちで、扉に手をかける。

「遅かったね。……とはいっても、あたしもさっきここにきたばっかりだけど」

扉にかけられた手がピタリと止まる。用心深く振り返った先に、ベイルがいた。

「やっぱりあんたが絡んでいたのね……！」

今日一日、この妹に振り回されっぱなしだった。言葉が怒りを孕んで震えている。
「違うって。ちょっと力を使いすぎて疲れたから、さっきまで寝てたんだもん」
重たげな目蓋を擦りながら首を振るベイルは無邪気そのものだ。魔に侵蝕されてから何度も騙されてきたが、今度は嘘ではなさそうだった。玲奈は黙って、続きを促した。
「ま、間接的には関わってるけど……ほらあれ、淫気をこの学園だけに閉じ込めたのよ。その封印に力を使ったせいで眠くなっちゃって。さっきまでお昼寝してたの」
真っ黒な空に顔を向ける。
「なにか使い道があるかと思ったんだけど……勝手に凝り固まって下りてきちゃったみたい。その影響で、センセイたちもおかしくなっちゃったんだね。あたしって天才？」
玲奈は、そう言いながら首をかしげる妹のふざけた態度にイライラしていた。いや、この扉の向こうで起こっていることが気になって仕方がないのだ。
（早く助けなきゃいけないのに……！）
まずはベイルをなんとかしなければならないようだ。
が、そんな考えを表情から読み取ったのか、ベイルはこともなげに口を開いた。
「ああ……気になるんなら入っていってみれば？　あたしは邪魔しないよ。もう、そんなことするまでもないみたいだからねー」
クスクスと楽しそうに笑う妹を不快に思いながらも、背後の扉が気にかかってしょうが

ない。玲奈は妹を憎々しげに一瞥したあと、思いきって背を向け、扉を開いた。
大勢の生徒と教師たちが、体育館の中央を囲むようにして立っている。入ってきた玲奈になど誰も気がつかないほど、みなはなにかを凝視していた。
人垣の隙間から垣間見えたのは予想通りの光景だ。頭に血が上った玲奈は、すぐにその人垣に向かって走っていた。
「どきなさい！　姉さんから離れなさいよっ！」
だらしなく下半身を露出させた生徒たちを掻き分け、烈火のごとく怒ったシスターセリティアが突入する。姉にのしかかっていた生徒を一瞬で引き剥がし、投げ飛ばしていた。
「れいな……？　れいなが……どうしてここに……？」
ぼんやりと自分を見つめて呟いたクレアの姿は、無残すぎるものだった。
自分もなんとなく感じてはいたが、淫気のせいかクロスの力が弱まっている。姉の聖衣はただの布のように変異してしまったことを表すかのように、あちこち穴だらけになっていた。乳首が覗くどころか、片方の乳房は完全に露出してしまっている。しかもその膨らみからは母乳のようなものまで噴き出させて……。床に敷かれた運動用のマットがそれを吸い、ぐちゃぐちゃになっていた。凛々しさの中にかわいらしさを残す腰や頭のリボンも、いろいろな液体を吸ってまだらな染みを作っている。
「姉さん、早く！　こんなとこからさっさと出るのよ！　こんな奴ら助けなくても――」

そう言って周囲の生徒と教師を睨みつける。
彼らはベイルに直接操られたわけではない。確かに淫気を閉じ込めたのはベイルだが、その誘惑に負け、自ら姉を汚したのはここにいる彼らだ。
「違う……。彼らは悪くないのよ……、玲奈……？」
が、抱き上げたクレアは彼らを弁護する。
セリティアも内心では分かっている。淫気の魔力に普通の人間が逆らえないことを。だが、どこまでも人のよい物言いをする姉をいいように弄ばれた怒りを、どこかにぶつけたくてしょうがなかった。汚れた姉を見つめる、泣き出しそうな瞳がそれを物語っている。
「……っ、いいから！　早く出ましょう！」
セリティアは白濁した液体にまみれた姉から顔を逸らすと、周囲の生徒を警戒しながら姉の肩を持った。だが……。
「それはいや。まだ……満足していないもの」
その手を振り払ったのは他でもない、クレアだった。足元はふらふらしているくせにハッキリとそう言って次女の手を払い、彼女は尻餅をついた。
「な、なにを……。姉さん⁉　どうしちゃったのよ！」
戸惑うセリティアの声。しかしクレアはそんな妹のことは眼中にないらしく、なにも応えず生徒たちのほうに這いずっていく。

「あは……さっきの続きを……。お願いしますぅ……」
そして虚ろに呟いて手近な生徒のペニスを握るや、無造作に口腔へ呑み込んだ。
亀頭に舌を這わせ、ぴちゃぴちゃと卑猥な音を立てて舐めしゃぶる姉の姿。非現実的すぎた光景を受け入れることができず、セリティアはそれを止めることすら忘れていた。
「姉さん、淫気の影響で……」
姉の身体に男子生徒の身体が折り重なっていくのを見ながら、呆然として呟くセリティア。その彼女に間髪入れず、呟きを否定する声が背後に聞こえた。
「違うよ。確かに淫気によってきっかけは得たけど、この結果を選んだのは由香里お姉ちゃんの意思。男に奉仕して悦びを得る、お姉ちゃんの本性だよ」
ベイルが自慢げに腕組みして立っていた。
「そんなの違う……！　そんなわけないじゃない！」
憎しみを向ける相手が現れたことで我に返ったセリティアが、憎しみの炎を瞳に宿す。
「言ってなかったけど……あたし、お姉ちゃんたちに殺されかけてから、なんとなく分かるようになっちゃったんだよね……。そういう、人に隠された欲望が」
にこりと微笑むベイルは残酷な言葉を続けた。
「それは玲奈お姉ちゃんも同じだよ。初めて犯されてから毎日、いやらしい夢見てたでしょ？　分かっちゃうんだから……お姉ちゃんは虐げられると嬉しくなっちゃうんだよね」

「な……んで……⁉　な、なによそれ！　冗談はやめなさい！」
否定しつつも、セリティアの心臓が大きく飛び跳ねていた。
確かに夢は見ていた……しかしあれは悪夢だ。自分からあんなことを望むわけが……。
ベイルが知っているのは、彼女が力を使って見せた夢だからだ。きっとそうだ――。
だが、そう言われてなぜこんなに冷静なんだろう。胸は高鳴っているのに、心はまるでその言葉を受け入れているかのように静かで小波ひとつ立っていない。
「由香里お姉ちゃんも同じ。ずっとこうしたかったのに理性で抑えつけてた。……ついでに言えばあたしはね、虐げるのが大好きなの。お姉ちゃんとは逆だね」
頭がぼうっとして、決めつけられていることを理解するまで数秒間を要した。
「ち、違うって言ってるでしょう！　こんな……！」
思わず目を向けたクレアは男のモノを受け入れ、いやらしく身体をしならせていた。
「ひっ！　あはぁぁ！　すご、いいっ……！」
あからさまな言葉を吐きながら、何本ものペニスにしゃぶりついている。
その姿を見て、セリティアはなにも言えなくなってしまう。
「まあ、お姉ちゃんもすぐに分かるよ……。すぐに……」
すっと遠ざかった声と入れ替えに、周囲の生徒が襲いかかってくる。彼らにとって新たに現れた女生徒は、淫らな格好をしたシスターガーディアンであり、学園でも指折りの美

少女、そして自分たちに捧げられた生け贄だった。さっきから先走るペニスを押さえ、襲いかかる機会を狙っていたのだ。身体中に手を回し、引き倒そうとしてくる。

「や、やめなさい！　放しなさいっ！」

さすがにセリティアは抵抗した。もちろんただの人間が彼女に敵うはずはない。力は衰えているとはいえ、この程度なら問題はない――はずだった。

絡みつく腕を引き剥がし、掴みかかる生徒を投げ飛ばしていた彼女の足に、まったく異質なものが絡みついてきた。

「えあ……？　う、そ……！　なんで魔物が！」

彼女がそう思ったのも仕方がない。それは人ならざるものの触手だった。

しかしよく見ればそれは、周囲の生徒から伸びてきている。生徒の何人かが魔物化し、ペニスや腕を触手化させていたのだ。太さは通常のペニスを一回り太くした程度のものから、腕回りと同じものまで様々だ。セリティアは初めて見たため分からなかったが、それは触手魔神のそれに似ていた。かの魔神から生まれた淫気を恒常的に吸ったうえ、理性を暴走させて久しい彼らの身体が変質し始めていたのだ。

（このままじゃ、完全な魔物になってしまう……！　でも……！）

セリティアの推察通り、彼らは一日もすれば完全な魔物になってしまうだろう。早く浄化しなければならないが、いかんせん数が多い。ただでさえ力が弱まっているというのに、

このままでは数に押されて……。しかも逃げ出せば、姉を見捨てることにもなる。
輝き現れた鞭を振り下ろす。しかし、振り下ろされた武器に光の勢いはまったく感じられなかった。彼らはまだ人間なのだ。それに全力の攻撃をしてしまっては、命に関わるかもしれない。絡みつこうとする触手を打ち払うだけで、それ以上の攻撃ができなかった。
そのせいか彼女は隙だらけだ。すさまじいスピードで地を這ってきた触手が、四方から同時に押し寄せてきた。ひゅんと跳ねた触手が手に絡みつく。無防備になった胴に、足に、次々と触手が巻きついてしまった。
あっという間にがんじがらめにされたセリティアは、引き倒そうとする触手と綱引きしつつ直接手の平で引き剥がしにかかった。生温くぬめる肉紐は気持ちのいいものではないが、必死に掴んでは嫌悪感とともにかなぐり捨てていく。ただ、そうしている間にも次々と触手は絡みつき、生徒たちは手を伸ばしてきた。その数は増える一方。
「くぅ……！　しっかりして姉さん！　姉さんっ!!」
彼女一人ではどうしようもなかった。無意識に叫んだ助けを求める声。しかし、いままでともに戦ってきた姉の姿は一向に現れない。
「きゃああっ！　く……うう」
身体中にまとわりついた触手が彼女の手から武器を奪う。膝が折れ、身体が崩れる。首に回った触手が顔面まで到達し、巻きついて左右の目を覆い隠した。手足の自由も、視力

すら奪われて、あとはもうどうしようもなかった。ツインテールの髪房を乱暴に引かれて倒されたセリティアの手首足首に触手が絡まり、ぴんと引っぱって拘束する。マットの上で大の字で仰向けになった彼女は、わずかに身体を揺らすことしかできなくなった。

「んうっ！　くううううっ！」

必死に手足を引き戻そうとする。が、その努力は虚しく空回りするだけ。顔面に巻きついた触手が這いずり、咄嗟に閉じようとした口に入り込んでくる。

「は……く……！　んんうっ！　ぷは、んぐぅう!!」

反射的に噛み切ろうとして躊躇する。それはまだ人間の身体の一部、生徒らの男性器なのだ。そんなものを噛みちぎることなど……。そんなわずかな戸惑いの時間すら許されず、次々と手が伸びてくる。

「むぐううう！　ふっ！　うううう！」

目の前にのしかかってきた生徒が乳房を思いきり握りしめていた。身体を包んだ聖衣はやはり彼女を守ってはくれない。姉ほどのボリュームはないものの、それでもCカップで形のよさを誇っていた乳房が、男の手に弄ばれるままぐにぐにと潰されている。ぴったりと肌に密着した聖衣はその感触を忠実に伝えるだけで、痛みを和らげることはない。

「んくっ……ふむうっ！　ぐ、うっ……！」

身体がよじれ、セリティアはジタバタと身悶える。思いきり声を出して叫びたくとも、

口腔の触手がそれをさせてくれなかった。しかも身体を動かして気を紛らわせる術すら封印されている。わずかに身悶える他は耐えることしかできない。
両の乳首が無理やりに摘まれる。まだ勃起しておらず柔らかな出っ張りでしかないそれを、指先がぎゅっと挟んで引っ張り出すようにしごいた。きゅうっと胸の奥が縮むような痛みに、彼女の身体も引きつって縮み上がった。
「きひっ！　んふううっ！　ぶほ……っ！」
息が苦しい。口腔内を暴れ回る触手がねとねとした先走りのような液を吐き出すせいで口がいっぱいになり、呼吸がしづらいのだ。液体が口の端から逆流し、だらだらとこぼれ落ちる。ごほごほと咳き込んではやっとのことで息を吸う。
呼吸の乱れに合わせて激しく上下する乳房と、へソのへこみまでがはっきりと分かる腹部に指が這った。男性のごつごつした手が、均整の取れたスタイルを確かめるように荒々しく撫で上げてくる。普通ならなんのことはない接触が、この状況では異常なほど心の琴線をかき鳴らす。
（いやらしい……！　こんな、こんな乱暴な……ううっ！）
豊かな肉の膨らみと細く締まった腹筋の上を下りていく指が、露出した太腿の付け根で止まった。向かい合った内腿が、ぐいぐいと揉みしだかれる。
「むっ、っふう……」

塞がった口から漏れる呻きに、かすかに変化が起こった。唯一自由の利く首が反らされる。顎がくいと持ち上げられ、乳房が張ってぐっと持ち上げられた。さっきまで痛いほどの強さでしごかれていた乳首は、クロスに陰影を作って勃起している。

太腿のくすぐったさが腹筋を震えさせていた。肌が撫でられるたびにぴくぴくと締まる腹筋を見て、周囲の男たちは膣圧の強さを想像して唇を歪めている。

顔面に巻きついた触手に目を隠されているので周囲の様子は分からない。だが、音は聞こえる。はあはあと激しく吹きかけられる息の流れや、意味の分からないざわめき。そしてクスクスとかすかに聞こえてくる男たちの低い笑い声。それらがすぐそばに感じられて、必死に抑え込んでいる恐怖心を膨れ上がらせてくる。

身動きできない女体を前に欲望を滾らせた男は、内腿を押さえたその指で股間を押し開いた。身を屈め、秘所に顔を近づけていく。

（なに……！　なにをしているの……！　見えない……まさか匂いを嗅いでいるの⁉）

パニックに陥った彼女の首がぶんぶんと振られる。その耳に、はっきりと聞こえてきた。股間に密着する寸前で止められた顔が、犬のようにくんくんと鼻を鳴らしていた。

「んむううっ‼　ぷは！　や、やめてぇ……！　そんなトコ……嗅がないでっ！」

触手に舌が触れ口腔に擦りつけられるのも構わず、全力で押しやって排除した口が必死に拒絶を伝える。しかし返ってきたのは、より激しくなった鼻息と、鼻先が擦りつけられ

る反応だけだった。クロス越しとはいえすさまじい屈辱だ。
　んっ、と詰まった声を上げて硬直したセリティア。その股で卑猥な匂いを楽しむ男は、さらに興奮を増して顔面を押しつける。すうっと吸い込んだ空気に、若い女性ならではのきつい淫臭が混じっていた。今日はただでさえ何度も愛液を排出させられ、性臭がきつい。そんな箇所の匂いを大勢の面前で嗅がれるなど、いくら相手が理性を失っているとはいえ耐え難いことだった。顔は一瞬で真っ赤に燃え上がり、悔しさと恥ずかしさで涙が滲む。
「やめて……お願いだから……！　んぶっ！」
　できるのは、相手の良心に期待した懇願だけ。しかしあまりに無力なその言葉も、再び触手が封じてしまう。自分にできることの余りの少なさに絶望する。
　すうっと息の吸い込まれる音がするたび、心臓を握り潰されるような羞恥心と惨めさが襲ってくる。視界を塞がれているだけになおのこと、嫌な想像は深まって彼女を悩乱させた。自分の股間が変な匂いをさせているかもしれない――。きっと笑われている――。嬲り者にされた自分を眺め、生徒会長はこんな女だったんだと嘲っているに違いない――。
　想像の膨らみとともに、セリティアの身体は雨に濡れた子猫のように震え始めていた。しかしなぜだろう。頭が混乱し、緊張すればするほどに感じる身体の熱はどんどん高まっている。悪寒を感じずにはいられないはずの行為に、身体は火照っていた。ずくん、ずくん、と腹部で熱を発するそれは、羞恥に燃える心とは別のモノだ。

擦りつけられる股布はぷっくりした肉に密着していた。じっと見れば、赤いクロスの布地につっと割れ目の陰影がある。何度も擦られて浮かび上がってきた彼女の秘所だ。

そのうっすらと浮かび上がる影が、布地の伸張によって消し去られる。指先で股布が摘まれ、引っぱられていた。隙間から彼女特有の、薄く繊細な陰毛がかすかに覗き始めた。

「あ……くぅ……それ以上は……っ。……ひいっ！」

ぎゅっと伸ばされた布地が離され、パチンと音を立てて肌を叩いた。しかし縒られた股布は元の位置からずれ、彼女の恥丘が露出している。まだ清楚に縮み込んでいる割れ目や、そこから覗くこぢんまりとした小陰唇。足を広げられているせいでひだひだは広がり、奥の鮮やかなサーモンピンクが顔を出していた。

ずれた股布をさらに横へ押しやりながら、かすかな陰毛を茂らせている肉丘が左右に割り裂かれていく。クリトリスの膨らみから小さな膣口、尿道や肛門の窄まりまでが露わになった。その中で最も目を引くのは、ピンクの柔らかそうな粘膜がひくついている蜜壺の穴。そこは文字通り、蜜を垂らしていやらしく照り輝いていた。

まさか……セリティアはそう思った。確かに自分はこれまでも無理やりに感じさせられ、そこを蜜まみれにしてしまったことがある。だが、それはあくまでも無理やりの話。勝手に身体を弄ばれ、強制的にそうさせられたのだ。なのに匂いを嗅がれたくらいで濡れてしまうはずはない……自分は嫌悪感しか感じていないのに。そう、思い込みたかった。

滴を作ってとろりと柔肉上に流れる愛液を、生徒の指先が掬い取る。彼女の願いとは裏腹に、にちゃりとした感触は紛れもない彼女自身の液体だった。

男を求める肉体の反応を目にして、周りを取り囲む生徒たちの息が荒くなっていく。

「あ……いや……言わないで……」

聞き取れない周囲のざわめきが、すべて彼女に対しての笑い声に聞こえる。実際はどうあれ、彼女にとってそれは嘲笑のさざめきにしか感じられなかった。

ぬるり……。しかし愛液は着実に増えている。拭い取られたはずの滴がまた生まれ、ひくひくする彼女の膣口から押し出されていた。

ベイルの言葉が頭に浮かぶ。

――お姉ちゃんは虐げられると嬉しくなっちゃうんだよね。

違う違うと否定しても、頭の片隅にこびりついた疑念が消滅することはない。それどころか、毎夜夢に見た光景が押し寄せて彼女を責めてくる。無理やり犯され、感じさせられたのは自分の本性。そうして悦んでいたのは自身の肉体。自分の不幸な境遇に酔って、私はそこから快感を引き出していた……マゾのように？

（違う！　私は……そんな変態じゃないっ！）

ぶんぶんと首を振る。これはベイルの策略……そう思い込ませようとしているのだと。

必死に自分へ言い聞かせるセリティアの尻がぐいと持ち上げられた。細い腰を掴まれ、

恥部を上向かせられる。足を広げたまま、いわゆるまんぐり返しの姿勢にされていた。
「んふっ！　……うう」
いくら彼女が柔軟な身体を持っているからとはいえ、首を曲げ、胸を圧迫されるような姿勢では息苦しい。相変わらず触手は口の中でもぞもぞと蠢いているし、なおさらだ。
しかし彼女の尻に手を当てた男は彼女の苦しさなど気にもかけない。ただ、少女の蜜壺を眺めながら貫きたい、そう考えただけだった。
「ふぅぐ……んひゅうっ！　は……ふううっ!!」
必死に首を振る少女を見下ろして、股間へのしかかるように身体を傾けていく。ぴゅくぴゅくと先走りの滴を塗りたくりながら、亀頭が膣口を捉え、突き下ろされる形でもぐり込んできた。足を開いた状況で、当人以外にもその様子は丸見えだ。ただ一人、目を塞がれたセリティアを除いては。
小さく窄まっていた膣口が普通より一回り大きい巨根に押されてぐいっとへこんだ。ぱっくりと開いた股間の中央、秘穴がにゅっと広がって亀頭を呑み込んでいく。穴がじりじりと引き伸ばされ、やがてすぽっとカリ首までが入り込んでいた。
「ふくうっ！　は、はひって……やめへぇぇ……！　こんなのぉ、むりぃ……！」
不自然な体勢と不自由な手足、満足に口も動かせない状態で彼女は尻を振って必死に拒絶の意思を叩きつける。だが、先端を挿入し終えた生徒は空いた手で太腿を押さえ、彼女

の抵抗を力で抑え込んだ。

何十人もの生徒が見守る中、ペニスが垂直に近い角度で下ろされていく。まだ湿りが足りなかったのか、時折膣壁が亀頭に貼りつき、引っかかりを感じさせた。男にとっては適度に心地よい刺激も、犯される側にしてみれば苦痛でしかない。しかも無理な体勢で挿入されてくる男根は、真っ直ぐには侵入せずにゴリゴリと膣洞を抉りながら下りてくる。

「かふ……!!　う、は……ああ……!　ひ、ひゃ……あ!!」

絶句するセリティアの身体が硬直し、抵抗が止まった。

固まってしまった彼女の身体をほぐそうとしたのか、それともただ口腔を犯したかっただけか、口の中の触手が変化し始める。先端がへこんでホース状になり、突き出された少女の舌をくわえ込んでいた。ざらざらした感触が舌腹を押さえながら、引きずり出すように擦り上げてくる。大きく口を開けたまま突き出されていた少女の舌が、触手に生まれた口腔器官とキスを交わしているようだった。

触手は何度もピストンし、粘液を絡めながら彼女の舌をマッサージしてくる。

「はふ……ひぃ……。あはぁ……!」

強引な挿入と触手愛撫は確実な効果をもたらしていた。まだ彼女の気づかない心の奥が、ちくりとした痛みとともに快感の疼きを生み出し始める。めちゃくちゃな体勢で身体を嬲られているせいで自覚しにくいが、乱暴な貫きに晒されても愛液は噴出し続けていた。静

まり返っていた膣内も蠢きを開始し、侵入していた異物を締めつけ、奥へと導くようにざわつきだす。
触手が激しく動き出したおかげで顔面に巻きついていた触手が緩み、目隠しが取り払われていた。ぎゅっと目を瞑っていた彼女はやっとそれに気がつき、目を開けていく。
どこか蕩けたように見える瞳の焦点がゆっくりと合っていく。目前にあるのは自分の乳房。その先には窮屈そうな腹部とペニスの突き刺さる股間。そして――。
（小島君……どうして……!?　いやああ！）
目の前で血走らせた目をしているのは、彼女がすべてを話し、自分を理解してくれていたはずの後輩、小島だった。顔は母乳でびしゃびしゃになっているが、彼を見まごうはずもない。ただそれは、小島も他の生徒と同じく、クレアを犯したことを表していた。
セリティアの瞳から涙が溢れる。姉を犯したことだけではない。一度心を開いた相手にこんな裏切られ方をするとは……惨めな気持ちで胸がいっぱいになった。それは彼を憎みきれないせいでもある。小島が悪いわけではないと、心のどこかで理解しているからだ。ぎゅうと胸が締めつけられ、息ができない。
しかし腰を突き下ろす小島は、涙を流す想い人を見ても恍惚としたままだ。
「せんぱい……せんぱいぃ……！　濡れてきたよ……気持ちいいよっ」
涎を垂らしながら膣口を抉り、締めつけを堪能している。実際、彼女の身体は相手が小

島であることが分かった途端、反応を強くしていた。とぷん、と奥から染み出してきた愛液が膣道に満ち、ペニスと襞に絡みついて滑りをよくしている。なのに締めつけが強くなっているのは、膣口の動きを見れば明らかだった。肉茎を食い締めた入り口は、ピストンする肉棒を放すまいと緊縮している。内部もぎゅうぎゅうに縮み上がって、隙間から滲み漏れていた愛液がぴゅっと飛び出すほどだ。

「ひゃぁぁぁ……ほんなのって……ないよぉ……！　んぶぁぁう！」

彼女が悲しみ現実を否定するほど、肉体は感度を増すようだった。

魔物化した生徒の触手が何本か這いずってきた。地をのたくる触手はセリティアの身体に辿り着くと、とぐろを巻くようにして上っていく。肉紐が交差し、彼女の身体を幾重にも取り巻き始めた。腋の下から乳房を回って背中へ。そこから腹部に回るものや腕に絡みつくものまで、触手は粘液を吐き出しながら身体中を這いずり始める。

肌を撫でていく触手が身体を縛めようとしているのはセリティアにも分かっていたが、そのねっとりした肉紐から逃れる術はない。ペニスを突き刺される衝撃に為す術もなく身悶えするだけの彼女に、その中の数本が襲いかかった。

勃起していた乳首の蕾に先端が這い寄り、少女の口に入り込んだ触手と同じように、ホース状の穴を開ける。それが両乳首に吸いついた。

「うひゅううっ！　ち、ふび……がぁぁ……！」

叫ぶセリティアの目の前で、触手は粘土のように自在に形を変えて吸いついてくる。ぴったりと密着してくにくに揉みこねていたかと思うと、触手胴を鞭のようにしならせて乳首ごと引っ張り上げる。

子供に与えられた玩具にするような乱暴さで、責めは先端の蕾のみならず乳房全体に及んでいた。引っぱっては放し、震える乳肉を縛りつけては緩めの繰り返し。彼女の柔軟な乳房は歪に形を変えて、激しく弄ばれる。

「んくううっ！　はう！　ひゃめ……！　きひぃっ!!」

目の前で弄られているのにまったく手を出せない。無力感に苛まれながら、それでも彼女の身体は異常に燃え上がっていた。荒々しく揉みこねられた乳首にびりっとした電流が走り抜ける。それは痛みに似ているが質の違ったものだ。

セリティアが悶えるたび、全身を縛った触手の締めつけが強くなっていく。きゅっと聖衣を衣擦れさせて、触手がめり込むほどに巻きついてくる。

どんどん身動きできなくなっていく肉体。反比例して高ぶり続ける性感。激しく責められれば責められるほど、疼きが増してどうしようもなく彼女を追い詰めていく。

荒々しくなる一方の抽送に押し出され、愛液が勢いよく飛び散っている。ぶぴゅぶぴゅと卑猥に音を鳴らしながら、セリティアの顔にも降り注いできた。

（こ、じまくぅん！　だ、だめ……もぉ……!!　ひいぁ……!!）

うわごとのような言葉が脳内をぐるぐる回る。塞がれた口から漏れ出るのは、意味のない喘ぎだけだった。加速のついた感情は後戻りを許さず、ひたすらに高ぶり続ける。
膣内を掻き擦る亀頭がいったん浮き、ひと息に突き下ろされた。愛液がひときわ多く飛び散って、淫猥な匂いと音を周囲に撒き散らす。
「ふぐうううっ！　くふぁ……んんん！」
背筋に強烈な電撃が走る。涙の溢れた目が切なそうに細められ、自分を犯す男に最後のひと突きを求める。しかし。
びゅくうっ！　どくどくっ！　ぷぷっ！
すさまじい勢いで流れ込む精液の感触。身体を震わせてそれを受け止めたセリティアの瞳に、抜け出したペニスがいまだに震えているのが見えた。それは大量の精液を吐き出してなお、白濁の残滓を振りまいている。
身体に巻きついていた触手も、白濁を垂れ流しながらするすると後退していった。
拘束を解かれて落ちた彼女が、マット上に力なく横たわる。仰向けになった乳房は激しく上下し、行為の激しさを物語っている。
ぐったりして呼吸を繰り返すだけの少女にペニスが向けられた。小島が白濁液の残滓を降りかけているのだ。髪や顔、乳房の丘陵にびちゃびちゃと降りかかってくる熱い粘液。
「あふ……んんっ……」

まだ高ぶりを保持したままの彼女の身体が、触手の吐き出した粘液と小島の精液に無残さを飾りつけられていく。しかし、ゆっくりと体表を流れ落ちる液体の感触に彼女が感じたのは、惨めさでも悔しさでもなく、物足りなさと安心感だった。もう少しで絶頂に達するという時に放り出されたために、身体は疼いたままで頭もぼうっとしている。ただ、こんな状況でイッてしまうという恥辱からは逃れられたことにほっとしていた。それが一時的なことにせよ、とりあえずは……。

その時、鈍った思考に冷水――というよりは温水がかけられた。断続的に身体へ放たれていた白濁が、一瞬にして変容している。

それは小島のものではあったが、精液ではない。少し黄ばんだ色をした激しい水流は、彼の小便だった。

「ひ！　小島君……なにを……⁉　やぁ……やめてええっ！」

身を翻して逃げようとする先輩の腹を足が踏みつける。びしゃびしゃと激しい水音を立てて降りかかる液体が、逃げ道を失った彼女に降り注いだ。

身体に当たる水圧が移動していく。腹部を濡らしヘソの窪みに液体を溜め、乳房の頂に移動した水流は柔肉の山稜を流れ落ちながらじわじわと胸元へ。

（やは……！　こんなのって……！）

一時的にとはいえ得られていた安堵感が掻き消され、暗い絶望が胸を満たす。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/